カトリック
広島教区報

No. 118
カトリック
広島司教区

発行責任者
広報担当
服部大介神父

「点訳版」あります。
お問い合わせください。

広島市中区幟町 4-42
広島司教館内
TEL（082）221-6017

福音宣教特別月間から「教区代表者会議」へ
― 教皇フランシスコとともに新たな歩みを ―

広島教区長　アレキシオ　白浜　満　司教

はじめに

九月十三日の午後四時に、ローマ教皇庁、また日本政府から教皇フランシスコが十一月二十三日～二十六日に来日され、東京、長崎、広島を訪問されることが、正式に公表されました。教皇フランシスコの来日が、日本の教会と社会のため、また、世界平和のため、神の新しい息吹をもたらすものとなりますように祈りつつ、心を合わせて、必要な準備を進めていきたいと思います。「いつくしみの特別聖年」（二〇一六年）の六月二十八日に、教皇フランシスコから広島教区への任命を受け、九月十九日（敬老の日）に司教叙階の恵みを受けたわたしにとっても、教皇フランシスコ来日は大きな恵みの機会です。

「福音のためならどんなことでも」（一コリント九・二十三）というモットーを掲げただいたわたしですが、この高尚なモットーからはまだほど遠く、広島教区の皆さんにご迷惑をおかけしているのが現状です。わたしを広島教区に任命してくださった教皇フランシスコの来広を機会に、不遜で未熟な自分自身を反省し、「よき牧者」であるキリストに近づくことができますよう、今後とも皆さんのご指導とご支援を、よろしくお願いします。

PROTECT ALL LIFE
POPE FRANCIS IN JAPAN
23-26 NOVEMBER 2019

「POPE IN JAPAN 2019」
公式ロゴマーク

福音宣教特別月間から始まる新たなチャレンジ

前回の教区報でもお知らせしたように、この十月は、教皇フランシスコが制定された「福音宣教特別月間」です。「世界宣教の日」にあたる十月二十日（第三主日）には、各小教区で「福音宣教特別月間一斉ミサ」を

白浜司教メッセージ・じゃけえのう　一～二面
世界平和記念聖堂　三面
平和行事　四面
JICaRM広島便り　五面
地区情報・海峡からの風・青少年・一粒会・ひと粒　六～八面

じゃけえのう

「じゃけえのう」とは広島弁で「だからね！」という意味。

幟町教会の信徒でカテキスタとして活躍されていた、マリア・ゴレッティ内海ひろ子さんが帰天されました。お別れの御絵にはテモテへの手紙から「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました」という言葉がありましたが、本当にその言葉の通り、学校や教会など様々な場所で、しっかりと自分の道を走りとおされた方でした。幟町教会の毎日のミサの準備はもちろん、通夜や葬儀などの準備もすべて整えてくださり、自分たち司祭としても本当に助かっていましたので、体調を崩されてから居られなくなり、その有難みを改めて感じていたところでした。

この広島教区報の編集委員としても活躍してくださったこともあり、ちょうど帰天される前日に今号の編集会議があり、内海さんからの言葉を何とかお願いできたらと現在の編集委員で一緒にお祈りをしていました。このたび内海さんが編集委員をされていたころの教区報を探したところ、編集後記である「風紋」に内海さんの言葉がありましたので、それを掲載し、彼女の思いを引き継いで行きたいと思います。

「昨年十月に始まったロザリオの年も残り一カ月足らず。教皇が示された『光の神秘』に感謝。これを機に、聖母マリアを通して、キリストの生涯を深く心に留め、キリストの心を心として日々過ごしたい。そして、隣人愛に励み、世界平和実現に一歩でも近づきたい。」

（教区広報担当司祭　服部　大介　神父）

ささげて、「喜びをもって福音をのべ伝える教会」を目指して一年間の準備をおこない、来年十一月二十三日に、第三回目となる「教区代表者会議」を開催することにしています。

前年（二〇一八年）十二月八日に開催された「教区宣教司牧評議会」において、わたしは、広島教区という「神の家族」（信徒、修道者、助祭、司祭、司教）が、今後の歩みのためにともに祈り、考え、分かち合い、より重要なことを識別していくことができるように、二〇一〇年を最後に途絶えていた「教区代表者会議」の開催を提案し、賛同をいただきました。今年度に入り、準備委員会を設置して会合を重ね、徐々に準備を進めています。間もなく具体的なロードマップが示されて、小教区や協働体での意見交換・分かち合いを促すためのアンケート調査が実施されます。その結果を地区ごとに集約し、「教区代表者会議」での分科会や全体会での提言に反映させていきたいと思います。是非、教区の新しい歩みのために、皆さんからの積極的なご意見をお聞かせくださいますよう、よろしくお願いします。

アンケートと「あゆみ」という資料

その際、参考にしていただくものとして、後日、アンケートとともに配布する「教区代表者会議準備委員会」がまとめた、「二〇二〇教区代表者会議に向けてのあゆみ」という資料があります。広島教区の信者が一つになろうと集まり、大きな転機になった、「二〇〇二教区大会」を起点に、「二〇〇五教区代表者会議」、「二〇一〇教区代表者会議」が開催されました。何を思い、何を課題として、過去に二回、教区代表者会議が開かれ、来年行われる第三日目の開催に繋がったのか、この「あゆみ」を参考にすることにより、これまでの足取りを振り返ることができます。さらに、新たな視野が広がり、具体的な提案につながっていければと考え、以下、この「あゆみ」の一部を抜粋・要約したいと思います。

二〇二〇「教区代表者会議」に向けて

「二〇一〇教区代表者会議」から一〇年。教区創立一〇〇周年を控えて、これまでのわたしたちの歩みを振り返り、「ともに喜びをもって福音を伝える教会へ」を総合テーマに、第三回目となる「教区代表者会議」が開かれます。

①これまでの歩みの振り返り

宣教司牧に関する「司教宣言」（二〇〇六年）によって「平和の使徒となろう」という教区固有の永続的な目標が設定され、それを支える「平和、きょうどう、養成」という三つの柱が示されました。その後、「新ガイドライン」（二〇一三年）に定められた教区の優先課題（青少年育成、召命促進、教区共通のカテキズムの作成、津和野の証し人の列聖）、そして、三年ごとの段階的な「家庭・教会・社会へのチャレンジ」という教区の「宣教司牧テーマ」も打ち出されました。これらの固有の目標、三つの柱、優先課題、宣教司牧のテーマに基づいて、わたしたちは、これまで、どのような取り組みをしてきたのか、まず、その成果と課題を検証し、確認することから準備を始めたいと思います。

②教区創立一〇〇周年の迎え方・祝い方

次年度（二〇二〇年度）からは「社会へのチャレンジ」への三年間が始まります。「いのち」・「環境」・「平和」というサブ・テーマにしたがって、わたしたちはどのようなことを実践しながら、教区創立一〇〇周年（二〇二三年）を迎える準備をすることができるのかについて、また同時に、一〇〇周年の祝い方についても考えてみたいと思います。

③一〇〇周年後の新たな優先課題や宣教司牧のテーマ

少子高齢化、多国籍化していく社会のあり方を見つめながら、人々に喜びをもって福音をのべ伝え、奉仕する教会を目指していくため、教会の機構・組織の見直しや今後の教会活動のあり方など、様々な観点からの検討をおこない、取り組むべき教区の新たな優先課題や宣教司牧のテーマを設定していきたいと思います。

以上のような点について、広島教区の皆さんから広く意見をいただくために、後日、アンケートを実施します。そのアンケートを集計・分析する過程とその結果から、様々な論点やキーワードが浮き彫りにされることでしょう。来年の十一月二十三日に開催される「二〇二〇教区代表者会議」に向かって、これから始まる準備段階が、多くの信者の思いや意見を集約するものとなるように、各小

教区、協働体、地区単位での話し合いや分かち合いの機会をもっていただくことが勧められます。皆さん、どうか、よろしくお願いします。

司教教書についてのお知らせ

これまで、二年間かけて準備してきた「広島教区における要理教育の新しい方針とカテキスタの養成」という司教教書を、二〇一九年九月八日付で発行しました。教区における要理教育のあり方についての確認や新しい提案とともに、二年間の周期で養成されているカテキスタの任務や養成コースを紹介する内容の小冊子です。各小教区に、二〇部ずつ配布させていただきますが、教会学校のリーダーや養成されていくカテキスタだけでなく、信者の皆さんに幅広く、お読みいただければ幸いです。興味のある方は、まだ予備が教区本部事務局にありますので、お問い合わせください。お分けすることができます。

重要文化財　世界平和記念聖堂
四年に及ぶ保存補修工事、ついに完了

司教座聖堂「世界平和記念聖堂」の耐震補修事業は、二〇一六年十月の着工以来、約四年に及ぶ工事が完了しました。広島教区の信徒の皆様、司祭、修道会の方々の犠牲により、完工することができたことを感謝申し上げます。この記念聖堂は、原子爆弾により、廃墟と化した広島の地に、復興のシンボルとして、戦後いち早く建設されました。今回の耐震補修工事までに、幟町教会の信徒の皆様の犠牲と努力によって、三度の大規模修繕工事に取り組み、鉄筋コンクリート建築物の健全性を維持してきました。その甲斐もあって、二〇〇六年に国指定の重要文化財に指定され、文化庁、広島県、広島市の財政的な援助により耐震補修工事に取り組むことができました。工事の詳細はこれまでに教区報でお伝えしてきましたので、ここでは省略します。

保存補修工事、最後の工事として、聖堂正面の十字架を取り外し修理を行った

広島教区の「平和の使徒となろう」の呼びかけのもと、世界平和と友愛を訴え続ける聖堂として、これまで以上に平和への取り組みを進める基盤が再整備されました。聖堂記には、「この聖堂に来て、戦争や原爆の犠牲者の安息と人類相互の恒久の平安のために祈る」ようにと招いています。先人の平和への努力に倣い、キリストの平和が広島の地に根を張り、実りをもたらすよう祈ります。今後とも、記念聖堂を広島教区の平和のシンボルとして保存活用して行くことを互いに誓いましょう。

完成記念式典と講演が行われた

十月五日、世界平和記念聖堂保存修理工事完成イベントが行われた。

十三時三十分から完成感謝式典が広島カトリック会館多目的ホールで行われた。式典では、文化財建造物保存技術協会から工事内容の説明、白浜司教の挨拶、設計監理を担当された文化財建造物保存技術協会理事長の高塩至様と工事を担当された清水建設株式会社広島支店執行役員支店長の三木正道様に施主であるカトリック広島教区長、白浜司教から感謝状が渡された。また、十四時三十分から世界平和記念聖堂で講演会が行われた。会の初めに「映像で見る聖堂の歴史、工事経過」のDVDが上映され、続いて、耐震診断検討委員会のアドバイザーとして関わってくださった、京都工芸繊維大学教授の松隈洋先生が、「世界平和記念聖堂と村野藤吾～祈りの造形に求めたもの～」をテーマにお話をされた。

松隈洋先生

世界平和記念聖堂募金
郵便振替口座

口座名義：カトリック広島司教区
口座番号：01320-3-109791

＊通信欄に「聖堂保存献金」と記入してください。

平和行事を終えて

平和行事実行委員会
委員長　栗栖　徹

白浜司教、勝谷司教、松浦司教、ウエイン・バーント司教

七十四回目のひろしま原爆の日を迎え、連日の暑さの中で平和行事を行った。今年は、世界平和記念聖堂の耐震・補修工事がほぼ終り、二年ぶりに大聖堂が使えるようになった。また懸案の空調設備が整い、パネルディスカッションや平和祈願ミサも随分と快適だった。

教皇フランシスコの来日を控え、メインテーマは、「平和の糸をつむぐ　～平和アピールをいただいて～」とし、沖縄に焦点を当ててプログラムを構成した。

最初のパネルディスカッションでは、三名の社会司教委員会の司教方に「平和の糸をつむぐための教会の役割を振り返る」と題して講演していただいた。続いての分科会は、①観音町教会朴南珠（パクナムジュ）さんによる被ばく証言、②配備計画進行中のイージス・アショア問題を、計画撤回を求める住民の会の森上雅昭さんとベリス・メルセス宣教修道女会シスター磯村かずよさんによる話、③沖縄の現状を那覇教区ウエイン・バーント司教、沖縄在住の会沢芽美さん、東京から辺野古問題を支援している斉木登茂子さんによる話、④県内の三つのカトリック学校がそれぞれ取り組んでいる平和活動を紹介して分かち合った青年プログラム、を行った。

青年プログラムの様子

また、例年通り日本聖公会と共催行事である平和記念公園供養塔前での「祈りの集い」に続き、世界平和記念聖堂までの「平和行進」が行われ共に平和を願い祈りや歌が捧げられた。

平和祈願ミサでは、ウエイン・バーント司教の主司式で、十四名の司教に参加いただいた。

六日は、原爆とすべての戦争犠牲者のためのミサの前にノートルダム清心中・高の生徒たちが平和アピールを朗読し、ミサに続いて会沢芽美さんによる沖縄戦の話とそれに題材をとった一人芝居を行った。

今年は、カトリック学校との連携を進め、ノートルダム清心中・高をはじめ、エリザベト音大、福山暁の星女子中・高、広島学院の皆さんに青年プログラム、聖堂案内、平和アピール朗読など、大勢参加していただいた。信徒の高齢化の所為か、平和行事への参加者が近年少なくなってきている。その状況にあってカトリック学校の皆さんに参加いただくことは、行事を続けていくうえで重要であり、来年以降も継続していきたい。

8月5日の平和祈願ミサ、ウエイン・バーント司教の説教の様子

写経キャンペーン
完了者紹介

新約・旧約聖書を完了された方

第0001号

有村 通子 様

（祇園教会）

J―CaRM広島便り

大阪教会管区セミナー報告

玉島教会　山井和子

右、山井和子さん

西日本豪雨災害から一年を迎えた七月六日（土）岡山教会で、J―CaRM主催の西日本豪雨災害在住外国人被災の現実～体験から考える～セミナーが開催されました。支援活動の体験を倉敷協働体サポートセンターの一人としてお話した一部を掲載いたします。

昨年の西日本豪雨災害の被災地域には、倉敷協働体の倉敷、水島、玉島の三教会の信徒が点在していて、日本人十三家族、外国人六家族、（ブラジル人一家族、フィリピン人五家族）が被災しました。日本人信徒の安否は所属教会の信徒名簿で確認出来ましたが、外国人被災者は所属教会がないため、小教区での対応は難しく被災者支援につなげるために、倉敷協働体豪雨災害サポートセンターを立ち上げました。集まった情報を基に外国人被災者名簿を作成しましたが、名前と顔が一致していませんでした。八月初め、連絡がとれていなかった四人のフィリピン人被災者にお会いし、正しい名前、携帯番号、被災の住所、現在の住まい、今困っていること、被災当時のこと等をお聞きし、サポートセンターについて説明して、やっと被災者の皆さんと連絡を取り合えるようになりました。

後日、バルト神父様とサポートセンターのメンバー二名で、外国人被災住宅をカーナビ頼りに一軒、一軒回りましたが、二階の床は落ち、一階は床と壁は剥がされて根太と柱だけになり、一、二階すべての扉を開け放して家を乾かしている光景に、改めて被害の甚大さを知らされました。

今回の外国人被災者の皆さんは、四十～五十代の方が多く、避難に際しては子どもさんや、ご近所の皆さんに助けをもらい、罹災証明や、見なし仮設住宅に関する情報、支援に関する事など、日頃から携帯を使って情報を得ることに慣れておられるのと、コミュニティからも必要な情報が届いていました。

避難所では、外国語の話せる保健師さんに助けて頂いたそうです。

外国人被災者の皆さんが現在住んでいる見なし仮設住宅を訪問して届け、とても喜んで頂いたプレゼントがあります。それは、寄せられた支援金で購入したご希望言語の聖書と、家族一人ひとりへのロザリオと美しいカードでした。この中に白浜司教様から頂いたロザリオとカードが含まれていて大変喜ばれました。レイモンド神父様と、何度も道に迷い、約束の時間に遅れても皆さん笑顔で待っていて歓迎してくださいましたが、慣れない土地、狭いスペースの住まい、この先の不安な思いでの生活の大変さを感じました。

外国人被災者の皆さんの前向きで明るい姿勢に元気を頂きました。それは、皆さんが結婚され、学校や地域に根ざした生活をされていて、日頃から色々な苦労を乗り越えて来られ、豪雨災害の困難な状況でも同じように前向きに歩んでおられるからだと思います。

これからの課題も見えてきました。

外国人信徒の名簿作り

一番の問題は誰がどこにいるのか分からないこと、名前と顔が一致していないことでした。これから技能実習生など一人暮らしの方も多くなると思います。信徒名簿を作成し、最終的には洗礼証明書を母国から取り寄せ、小教区に所属するようお願いします。

災害直後の相談の対応

被災直後に自宅をリフォーム出来るのか、建て替えが必要なのか相談あり、混乱の中専門知識のない私たちには答えられず、苛立ちと不安を与えてしまいました。相談先のリストを準備して行きたいと思います。

場所作り

このセミナーために外国人被災者の皆さんに体験を話して頂いた際、災害のトラウマは大きく、何でも話せる場所の必要を感じました。

ゆっくり話が出来る場所作りを考えます。

連携すること

被災した人は「これが必要です。困っています。」支援する人は「これがあります。これが出来ます。」と声を上げ連携すれば大きな力になることを沢山経験しました。日本人は声を上げることを遠慮しがちですが大切な事だと学びました。

災害から一年、サポートセンターの活動を通して沢山の皆さんの支援があること、どんな時も神様の計らいがあることに感謝しています。

次々に起こる大きな災害にこの体験を活かした活動が出来るよう、話し合いたいと思います。

会場となった岡山教会

地区便り

山口島根地区

＊「通夜・葬儀担当者」研修会

八月一七日（土）山口天使幼稚園ホールで、山口島根地区信徒養成委員会主催で表題の研修会が地区の各教会から一〇〇名以上の参加者と広島の祇園教会からの参加もあり盛況に開催された。

午前の部は、柴田神父様（徳山教会）から、映画ビデオ教材による「通夜葬儀に携わる人々」の機微や思いについて、さらに通夜葬儀時の説教の一例など、神学的司牧的な視点での大切さを解説された。

午後は、通夜の司式全般をすべて信徒で行っている実情について、宇部教会が特別に報告し、質疑を受け、その後八班に分かれて、表題全般についての分かち合いを行い、各教会の実情や課題などについて話し合った結果の報告を行った。

通夜葬儀が私たちにとって必ず直面する現実の課題であることから、関心の高さを痛感し、有意義な研修会であった。

（宇部教会　泉　國重）

広島地区

＊広島教区の日

九月十六日、幟町教会で「広島教区の日」行事が開催されました。午前中は広島地区行事として、世界平和記念聖堂の耐震工事がほぼ完成したので、そのお披露目も込めてカトリック学校・幼稚園・音楽大学の出演による演奏会が聖堂で行われました。聖堂の歴史と補修工事の様子を記録したDVDの上映会も行われました。午後のミサは多国語ミサで、英語、フィリピン語、スペイン語、日本語の歌が歌われ、共同祈願は日本語、フィリピン語、スペイン語、ベトナム語で祈りました。天候にも恵まれ、ミサ後の銀祝・金祝・ダイヤモンド祝の方々のお祝いの軽食パーティは会場に入りきらないほど大勢の人が参加してくださり盛大なお祝いとなりました。（東広島教会　藏田克則）

ノートルダム清心高校の箏曲部による琴の演奏

「教区の日」集合写真　世界平和記念聖堂

岡山鳥取地区

＊岡山鳥取地区の青年の動き

今年度より担当司祭にレイモンド神父様を迎え、岡山鳥取地区青年連合は新たに歩み始めました。最初の動きとして、

海峡からの風 54
下関労働教育センターだより

受容・真実・和解

七月七日、北九州市立男女共同参画センター・ムーブにおいて東ティモール住民投票二十周年記念講演会を開催した。

東ティモールは二十年前インドネシア軍と民兵による様々な脅迫、妨害にも関わらず、九十七％の投票率で約八割が「独立」に投票し、二十四年間に及ぶインドネシアの占領から解放されることになったが、結果発表直後から軍・警察・民兵による徹底的な破壊と暴力と拉致があった。東ティモールの人々は占領期に生命及び性的も含め暴行被害を受けて来たにも関わらず、テロを行わず、報復を選ばず、捕らえたインドネシア兵に正義と平和を説いて解放して来たことが、同時上映した映画「カンター！ティモール」にも描かれており、感動を覚えるのだが、この日の講師、占領期性暴力被害の女性を支援する団体代表のペレイラさんは、性暴力被害者の救済を政府はほとんど何も行わないままで、それどころか家父長制、男社会の東ティモールでは、性暴力被害を生き延びた女性たちに正義の実現、尊厳の回復どころか、補償も受けられず、夫には捨てられ、コミュニティの中では「汚れた者」として差別を受け、排斥され、まともな仕事収入もなく、インドネシア兵との間に生まれた子供は市民権の証書も発行してもらえず、貧困も加わって教育の機会も奪われていることを語った。そんな被害者たち一人一人に寄り添い、心理学的手法も取り入れて支援している。

今回の話、また昨年下関で行われた「修復的正義」のセミナーで学んだ様に、東ティモールのみならず日本も含めた国際社会は、性暴力被害の真実を受容し、そのサバイバーの正義と尊厳を取り戻すことが和解には求められていると感じている。

（大城研司）

レイモンド神父様の呼びかけにより、八月四日（日）に岡山鳥取地区の青年を集めて今後について話し合う機会を持ちました。日曜日も仕事でミサに授かれないが、ミサに授かりたいと思っていること、イベントに対して青年からの誘いだけではなく、神父様やシスターからの声かけがとても嬉しいことなど、さまざまな意見が出ました。また、小教区でのつながりだけでなく、小教区を超えたつながりも大切であると再確認ができました。青年に対してはSNSでのアクセスが必要だと話し合い、担当者をつけ、今後も活動予定や報告を積極的にしていく予定です。今後も地区での青年のつながりを大切にしていきたいと思いました。ぜひ応援とお祈りをよろしくお願いします。

（岡山鳥取地区青年連）

青年の集いポスター

青少年の活動

広島教区練成会

大学生リーダーとして参加させていただきました。防府教会所属の竹添民です。

まず、この三日間で改めて感じたことは「素直」ということの素敵さです。素直に受け入れ、素直に楽しみ、素直に学び、素直に平和を願う。リーダーの自分が良い影響を与えてもらい、パワーをもらった三日間でした。

一日目、再会あり、新しい出会いありで、少し緊張しつつも暖かい雰囲気の下、練成会がスタート。神学生のご指導の下、聖書や教皇様についてみんなで学びを深めました。

二日目は、原爆について学び分かち合った後、市電で平和記念公園に行き、お祈りをし、その後にプールそして最後にバーベキューという夏満喫の一日でした。プールで約三時間泳いでも。最後まで元気もりもり。小さな身体に持つパワーの大きさに圧倒されました。

三日目ミサでは自分たちで作った共同祈願を唱え、記念品を奉納しました。それぞれの日々へ向けて解散するみんなの顔から、この三日間が大切な時間だったということを改めて感じる事が出来ました。

最後になりましたが、この素敵な時間を作ってくださった神学生をはじめとするリーダーの方々、いつも暖かく見守り支えてくださる神父様、とっても美味しいご飯を準備してくださった教会の皆様に、この場をお借りしてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

（防府教会　竹添民）

白浜司教を囲んで（世界平和記念聖堂）

広島教区一粒会

哲学科二年　星野倫淳（ともひろ）神学生

広島教区の皆様、私は広島教区の神学生の星野倫淳と申します。いつもお祈りと温かい励まし、そしてさまざまな援助、たいへんありがとうございます。私の出身は群馬県なのですが、主の御計らいと、白浜司教様、広島教区の神父様方のご厚意により、広島教区の司祭の卵として生活させていただいております。

いきさつについてもう少し詳しくお話ししたいと思います。私はこちらに来る前、観想修道会の修道者として祈りの生活をしていました。この祈りの体験をとおして、主は私に、人々に対して抱いていらっしゃるご自分の愛や、そのなされた救いの御業とその意味、人々に与えられている救いの希望（それは神の愛と全能の力によって必ず成し遂げられると私は信じております）などについて、わずかばかりの知識を下さったように思います。このことは私の心を、修道院の外にいる、多くの人々に向かって開かせました。「イエス様のことを伝えたい」。修道院の院長様はそんな私に教区司祭の道を試してみるようにとお勧めになり、少々面識がありました白浜司教様にお願いして、広島教区の神学生にしていただいたという次第です。広島に来ましてから、自分がこちらに来たのは何かの気の迷いや間違いではなかったと、ますます感じるようになっています。

よい牧者であられたキリストは、羊のために命を捨てられました。私も主イエスに倣い、皆様一人一人のために、そしてすべての人の永遠の命のために、主と一致して自分の命を捨てることができますように。このような形で、皆様のご恩にお返しができますようにと主に祈っております。弱く罪深い私においてさえも、主がその全能の力と深い憐れみによって、皆様への愛のためにご自分の業を成し遂げられますように。どうぞ皆様、これからもお祈りをお願い申し上げます。

ひと紋〈102〉

「日本に派遣されて」

福山教会・尾道教会主任
アルナルド 神父

一九九一年六月八日（土曜日）に司祭叙階を受けて、次の木曜日に神学校に戻ると、ミサが始まる前に神学校院長から「あなたの派遣先は日本です」と伝えられましたが、私は予想していなかったのでびっくりしたことを覚えています。まずは英語の勉強のために翌年の六月までイギリスに行き、一九九二年九月十六日に日本に着きました。

一年目は東京都府中市の教会に住みながら日本語学校に通い、一九九三年九月に観音町教会（主任司祭は肥塚神父）に引っ越しして、紙屋町にあった学校で日本語の勉強を続けました。観音町教会はスカウトの拠点となっており、遠足に誘ってもらったり、野外ミサをしたりなどで、色々な人と交わるきっかけが与えられました。観音町教会には〝マノス・ウニダス〟というペルー人たちのサポートのグループがあり、毎日多くのペルー人たちが通っていました。ボランティアたちが日本のことを教えたり、祇園教会からバリヨヌエボ神父様がスペイン語のミサや平日の夜聖書の勉強の為になどよく来ていました。またブラジルからSr.八木橋が広島に帰って来たところで、海田でポルトガル語のミサをするための司祭を探していました。その時はまだポルトガル語での会話はうまくできませんでしたが、神学校で月に二回ポルトガル語のミサをしていたので「前もって練習すれば出来るでしょう」と答え、十月十七日から月に二回Sr.八木橋と一緒に海田でポルトガル語のミサが始まり、私はブラジル人と関わるようになりました。

日本語学校での勉強を終え、一九九四年十一月に加古川教会（大阪教区）に行きました。そして一九九七年廿日市教会（主任司祭は山口神父）に派遣されました。教会では特に中学生たちと関わりました。光の園にもよく通って、朝のミサをしたり、子供たちと一緒に土曜日の午後サッカーをしたり、楽しく関わっていました。廿日市で数人のフィリピン人のお母さんたちに知り合ったので、姫路にいたフィリピンのシスターに時々来てもらい集会をしていました。彼女たちは友だちを誘ってだんだん人が増え、廿日市で働いていたフィリピン人の研修生にも出会って月に一回英語のミサが始まりました。その子どもたちはほとんど洗礼を受けていましたが、その後の信仰教育はなかったので、それを進めようとしましたが、数か月後に私は福山教会に異動となり、残念ながら続きませんでした。

一九九九年の復活祭は四月四日でした。観音町教会での午後のスペイン語のミサのときにペルー人の三人の小学生に洗礼を授けましたが、実は今年の四月二十八日にその内の数年前に結婚した一人の子どもに洗礼を授けることになりました。その後に福山（主任司祭は早副神父）に引っ越しましたが、すでにSr.春日がペルー人やブラジル人の家庭を訪問していて、その子どもたちの初聖体の準備をしていました。私は一年目からそれに加わり、この人たちはミサにほとんど行ったことがないこと知りました。ブラジル人やペルー人たちはほとんど伝統的なカトリック信徒なので、週末になってよくパーティーをしたり、海などに遊びにいったり、日曜日に遅くまで寝たりして主日のミサにほとんど行きません。その年から公立の学校は毎週の土曜日が休みになりましたが、両親は働いていたので、多くの場合家に子どもたちだけがいました。それで土曜日の午後に子どもたちを福山教会に連れていき、近くの公園で遊んでから公教要理の勉強をして、ミサで終わりにすることにしました。月に一回ぐらいはミサの前に季節に合わせて別のところに遠足する（冬にスケートやスキー、春にはしまなみ海道サイクリングや桜の千光寺で花見、夏には毎週プール、秋に動物園など）という形で土曜学校を始めました。参加していた子どもたちはほとんど福山と尾道の間の松永と高須地区に住んでいましたので、二年目からは場所を変えて高西コミュニティ・センターを借り（無料）、最後のミサは近くに住んでいる子どもたちの家でしていましたが、その後、二〇一七年四月からミサを尾道教会で十六時半にするようになっています。二〇〇三年から三原教会に代わりましたが、その後もずっと続けています。三原教会にいたときに毎年十人～二十人の子どもたちが初聖体を受けていて、ほとんどが南米やフィリピンの関係でした。

日本に来てから大切に思っていることは、キリストをまだ知らない人々に福音をのべ伝えると共に、信徒の子どもたち（日本人でも、日本に住んでいる外国人でも）への教育です。残念ながら教会での葬式の時によく見られることは、亡くなった人は信仰を守っていましたが、その息子や娘たちは洗礼は受けていても、教会から離れていますし、孫たちは洗礼も受けていないのです。教会で葬式をしないケースも多くなっています。信仰を育てるために不可欠なことは教育の継続であり、人々と関わり続けることです。時間とともに作られた信頼関係は大人になるまで年齢とともに信仰を強めるために大きな助けになるので家族がこの役割を果たすのは理想的ですが、教会の聖職者やリーダーの責任でもあるでしょう。

風紋

教皇フランシスコの来日が正式に発表されました。広島での滞在は短いものになりそうですが、この広島の地に来られ、メッセージを語ってくださることの「すばらしさ」をしっかり受け止めたい。（にん）